

稀であるとか、更に又、その比較において、アメリカ小説は *sentimentality* に堕していないなどである。いずれも極めて暗示的な指摘といえよう。

最後に結論として、これら四人のアメリカ小説家は、理想的な人間関係の場の建設と個人の精神的更生という *vision* を強く作品に打ちだしてはいるが、その実現への具体的な道を示してはいない。ただ、その崇高な思想と行為を支持する *moral energy* の宝庫を創りだしている点にこれら小説家の意義を著者は認めている。

ところで、全体としてのアメリカ小説に、この論がどのように展開されるかは、この新鋭批評家 Kaul 氏の今後の研究に期待するところであるが、非常に興味

×

×

×

×

×

A Reader's Guide to Herman

Melville. By James E. Miller, Jr. New York: Farrar, Straus and Cudahy. 1962

The Example of Melville. By Warner Berthoff. Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1962.

The Wake of the Gods; Melville's Mythology. By H. Bruce Franklin. Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1963.

松 山 信 直

Herman Melville は 1920 年代に「よみがえった」作家である。1920 年代といえ、いわゆる *imaginative literature* のさまざまなジャンルにおいて、いくつかの画期的な動向が起り、新しい試みが次々と華々しい成果をあげていった時代である。その華々しさの陰にかくれてはいるが、1921 年に完成した *The Cambridge History of American Literature* は、数多くの学者批評家の協力によって、アメリカ文学研究が *serious* な学問的研究に値することを立証した点で、意義のある著作となった。その後、1922 年には Carl Van Doren の *Contemporary American Novelists* が、1922 年には Louis Mumford の *The Golden Day* が、それぞれ出版され、1928 年には N. Foerster が、数人の執筆者によるアメリカ文学論 *The Reinterpretation of American Literature* を編纂した。そして、1929 年には、アメリカ文学全般にわたる研究に発表の場を提供する学術誌 *American Literature* が、次々と現れては消えていった“little magazine”と対照的に、学会を基礎として創刊された。

深く見守るに値しよう。特に、こういった *vision* が現代のアメリカ小説にまで受け継がれているのか、もし受け継がれてきているとすれば、どのような作品に、どのように変容して、引継がれてきているかが、われわれの関心事である。特に、本書が大胆にして開拓者的な試みであると思われるのは、19 世紀アメリカ小説解明の視点を *vision* においている点である。今迄、*innocence*, *solitude*, *escapism* などの視点から論じたものが多く出たがいずれも一面的な憾みがあったのにひきかえ、この *vision* への着目はこれら小説の複雑性を見事に総括して、研究者の理解、共鳴を喚ぶのに成功している。(同志社大学商学部助教授)

1891 年に死没した Melville は、1852 年に *Pierre* を出版して以来、その不評のために大方の読者から忘れられていたのだが、アメリカ文学再評価の動きの一環として、殆んどこの動向と歩みをそろえて再評価、再検討が加えられた作家である。

この Melville の“revival”は 1910 年代の後半から起りはじめ、1921 年の Raymond Weaver によるはじめての伝記出版をきっかけとして、Melville への関心は急速に高まった。そして海洋冒険物語のみならず、哲学的な、象徴的な、晦渋な作品を残した彼の数奇な生涯に光が当てられ、彼の作品が改めて読み直され、新たな感動を読者にひき起こすこととなった。

それ以来、熱狂的ともいえるほどの関心が Melville に向けられ、遺稿を含む数多くの資料が出版されたのみならず、さまざまな角度からの、さまざまな面に対する批評研究が企てられた。いわゆる *critical biographical* な書物も書かれたし、作品の *source*, *genesis* の研究、思想面の研究、他の作家との連関 (Milton, Shakespeare, Hawthorne, Transcendentalists など) も研究された。また、*folklore*, *myth*, *humor* などの観点からの研究でも、また、作品分析や彼の文学の芸術性の評価などでも数多くの試みが行われた。事実、Weaver の伝記いらい、この 40 余年の間に、Melville だけを論じた単行本が 50 冊近くも出版され、Melville に関する一章を設けた書物や、Melville を扱った雑誌論文、学位論文が 1,000 点にもなろうとしている例は、アメリカ文学に関する限り、Henry James を除いて、他に類がなかろう。このことは、文学批評の無限の可能性と多様性を語りつつ、あわせて、Melville 文学の偉大さ、深さ、多面性を我々に改めて強く印象づけてくれるのではあるが、その反面、この 40 余年間につみ重ねられた業績は、あらたに Melville に関して筆を

とうとうとする者をして、常に、必要以上に自己の著作の意義を自問せざるを得ないようにしている。反論の意識、従前とことなる研究方法確立の努力、あるいは、未開拓分野への先駆者意識は、最近の Melville 研究にみられるとくに著しい特色である。

反論の精神があればこそ新しい書物が書けもするし、新しい研究の意義もある。ここにとりあげた Miller, Berthoff, Franklin の三冊の書物も、従来の Melville への理解に対して、異説・新説をはげしくとなえる反論精神にあふれている。けれども、いまさら文学批評の本質的な多様性をひきあいにださなくても、*Moby-Dick* や *Pierre* をはじめとして、Melville の作品の多くが異った解釈を可能にするいくつかの意味の層と曖昧さを本質としていることを考え合せてみれば、批評家、研究家の描きだす Melville 像がいくつもあるのは、むしろ当然のことといえよう。従って、異説・新説をやたらに強調することは、説得力を減じ、論旨の魅力を失う危険を冒すことにもなりかねない。まして、反論の意識が先走って論旨に牽強付会が起るようなことでもあったとすれば、切角の研究の意義が全く失われてしまうことになる。

“A Reader's Guide”というシリーズの一冊として出版された Miller の著書 *A Reader's Guide to Herman Melville* は、Melville の作品に「新」解釈を下そうとはしているが、一般読者のために作品の意味を稀薄にすることなく解説し、Melville の芸術の特色を明解に語る、といった、“Guide”としての役割は必ずしも果していない。この書物のいくつかの章はもともと学術誌に小論文として発表され、多少の修正をほどこされてここに収録されたものである。小論中にはずいぶん洞察にあふれた興味深い論文もあったが（例えば、“The Achievement of Melville,” *University of Kansas City Review*）、一つの章としてこの書物にとり入れられてみると書物全体の構成を乱すものもあるし、雑誌論文という凝縮した形から単行本へと上げられて、逆に、oversimplification がめだつ考え方もでてきている。独立した論文の集大成として個々の論文の良さを生かす形で出版するか、それとも“Guide”に徹した書き下し作にするか、どちらかに踏切った方が賢明だったように思える。Miller はいわゆる「切れる」scholar-critic の一人としてほかにも立派な仕事をしているが、この著書に関する限り、目標を大きく誤ったという他はない。

Miller は、Melville について従来多くとられていた発展説——celebration から pessimism へ、信仰から

シニシズムへ、反抗から受容への質的变化発展——に対して、論旨の大前提として、Melville の諸作品は、中心問題と様式こそ異なっているが、テーマの上では直線的な連続性がある。つまり、質的な変化があるのではなく、複雑化、深化の発展がある、と主張する。

人間は不本意な誕生によって、悪が遍在する宇宙に不可避的にかかわりあいをもっている。この情況に対してどう反応すべきか、という問と、この問に対する答えが、Melville のテーマであると Miller は述べている。この問の考察にあたって、Melville は、暴力で反応する者、冷淡に反応する者、曖昧な反応を示す者などのさまざまな人間のドラマを描き、このドラマを通して Melville 自身みずから思索し、疑義を発し、評価を下し、裁きをつけたのだと、Miller は解釈する。更に、このドラマに登場する主役は、Taji から Billy Budd にいたるまで、事物はありのままの姿で存在するのではないという巨大な仮説を構え、それぞれ自己の innocence と善に向う願望を主張している。この innocence の「仮面」を、意識的にせよ無意識的にせよ、かぶっているということが、自己の情況に対する人間の特色ある反応であって、Melville はこの「仮面」の背後にある精神の深みを探索し、そこに隠されているものを探りだすのが自己の芸術上の仕事と考えた、と Miller は論じている。

この見取図自体はたいへん興味のある理解を示している。というのは、Melville における innocence についてこれを「仮面」として扱った人はこれまで極めて少なかったからである。もちろん、「仮面」という概念は *Moby-Dick* の Ahab や、*Pierre* にもみえていたが、innocence と「仮面」を結びつけた理解の仕方はなかった。Ronald Mason は *The Spirit Above the Dust* (1951) において、Melville の作品を innocence より experience への initiation を示すものとして理解したが、彼のいう innocence はいわゆるロマンチックな人間の本性的な善の域を出ていなかったし、W. R. B. Lewis のいう innocence は、仮面どころか、アメリカの伝統、American Adam の本質として、理解されていた (*The American Adam*, 1955)。ところが Miller は、innocence が仮面である限り、必ずしも肯定的価値を持つものではないとの立場をとっている。Miller の見解によれば、Billy Budd の innocence ですら仮面であって、彼は世界と自分に対してはキリストの如き清純という装をしてあらわれるが、彼は本質的には野蛮人であり子供であって、動物と異ならない野性的衝動を宿している。一方、Vere 艦長には、

Billy Budd と異って、理性と情緒、mind と heart、の間に均衡がみられる故に、この世の悪とその不可避性を認識して現世と堂々と和解し、強烈な悲劇的ヴィジョンを抱いているにもかかわらず“endure”することができるのである。従って、Miller によれば、Vereこそ、赤裸々な、自然な、未開の innocence の大破壊力から社会を守る人類の英雄なのである。

Miller は Melville のドラマに登場する人物を、この「仮面をつけた人物」の外に、「仮面のない人物」と、両者の中間に位置する「放浪者と探求者」の三つに分け、この分類を個々の作品の検討の主眼として論述している。

Miller が描いてみせる Melville 文学の図式 (Miller は “The Figure in the Carpet” という Henry James の短篇名にもみえている比喻を用いているが) はたしかに興味深いけれども、個々の作品の検討に入ると、それぞれの作品の個別的要素への解釈が入り乱れて、この図式はすっかりぼけてしまっている。たとえ一つのシンボルの意味への言及に目新しいものがあったとしても、その言及が、彼が立証しようとする図式の具体的な裏付と何の関係もないようでは論旨の統合が不十分だという外はない。さらに Melville の作中人物を三つのカテゴリーにわけたとき、問を發しその答えを求める Melville のダイナミズムに注目しておきながら、このカテゴリーを静的なものと考えたのには大きな疑問がある。Richard Chase が Melville の作中人物を Ishmael, False Prometheus, Prometheus の三つのカテゴリーにわけたとき (Melville, 1949. Miller の分類もこれとほぼ一致する), Ishmael 的人物から False Prometheus 的人物への変貌をとらえそこねたように (例えば, Taji, White Jacket, Redburn は developing character としてとらえられていない), Miller は「放浪者」と「仮面をつけた人物」との間の移行性を認めてはいない。従って、このカテゴリーをやたらと細分化する必要が必然的に起ってくる。最後の章に遡って更に primitives, rebels, the withdrawn, hypocrites, mystics 等がとびだしてくるのはそのためである。しかもそれでいて、マタイ伝10章16節の「蛇のごとくかしく、はとのように素直であれ」というキリストの言葉に示された二面性をそなえた「仮面のない人物」——Jack Chase, Bulkington, Plinlimon, Israel Potter, Rolfé, Vere——を一括してしまって、例えば Plinlimon と Bulkington との間の、現実に対処する態度の大きなへだたりを区別しようとしめない。要するに、Miller の書物は所々に興味のある新説が

ちりばめてはあるが、その新説の間の統合が不充分であって、“Guide”に徹しきれない異説意識過剰の所産という外はない。ところが、一方、Berthoff はこの異説意識を Miller よりはげしく表面にあらわしながらも、説得力を生みだすことに成功している。彼の *The Example of Melville* は Melville の芸術性、特に技巧を論じた興味ある研究である。

Melville が今日我々の手にあるのは、哲学者としてではなく、また、文化史、思想史の上での現象としてでもない。また靈的経験の著者、聖なる書物の著者としてでもない。Melville は一人の作家、すなわち、表現に秀いでた人間として、我々の手許にあるのである。Berthoff のこの大前提は、それ自身、文学に対する一つの態度を表明しており、文学研究方法論の上では決して目新しいものではないが、これまでの Melville 研究に対して激しい批評態度上の挑戦を企てているといえる。というのは、作家の一つの「例」としての Melville 研究は、これまでのところ決して等閑視されていたのではなかったけれども、とかく作品の意味、あるいは作者の思想をとりあげる研究が圧倒的に多く、芸術家としての Melville 論、Melville の作品の芸術性の論評などは比較的少なかったからである。

Berthoff はいう。偉大な作家に我々が示す関心の性質は、作家の心の中のたえまない想像力の活動によって定められる。想像力は外部に流れ出て、作家が手をふれるあらゆるものに、必ずしも常に明瞭であるとは限らないかもしれないが、特色のある烙印を押し人々を感動させる。だが読者は何によってこの想像力を知るのだろうか。Berthoff によれば、作家の想像力の働きは、具体的には、style と form によってうかがうことができるとされている。この style と formこそ想像力の外部表現に外ならないからである。Berthoff はそこで style と form をいくつかの面からとりあげ、Melville の技巧の背後にある想像力の質の理解に迫ろうとする。

Berthoff はまず Melville の想像力の成長を伝記的に簡単に考察し、次で setting, characters, storytelling, words, sentences, paragraphs, chapters などの項目を並べて Melville の技巧を論じている。これらの項目の羅列は、一見、末梢的技術論を展開しているような印象を与えるけれども、Berthoff は統計的方法をとらずに、最も特色の濃い、すぐれた例を取り出して論じる方法をとっている。当然のことながら、他の作家という「例」(examples)への言及が多く、例えば、Melville の多くの作品の物語様式として使われ

る narrator をとりあげた章では、18世紀末の C. Brockden Brown から、Poe, Hawthorne, Melville をへて、最後には現代の Salinger まで引き合いにだされている。このような比較的方法は、Melville を他の作家と直接的に対照させ、その対照によって、作家の一つの「例」としての Melville をうかび上げてくるところに興味がある。

このように比較してみると、Melville の想像力は、George Santayana が典型的にアメリカ的でプラグマティックだといったタイプのものだと Berthoff はのべている。このタイプの想像力は自己と自己に刺戟を与えたもののうちに感じたかくれた力を、芸術的意図とほとんど区別しえないため、常に “premonitions and prophecies” という形態をとって自己表現を試みるのだという。しかし、このようなタイプの想像力は、19世紀アメリカにおける因襲的な様式だった “exposition” に無関心ではあり得ない。だが、Melville の想像力は、一応この “exposition” の様式によってはいるものの、この様式からあふれ出たり、はみ出たりして、時にはこの様式の援助を意識せずに活動する。Melville で最も印象的なのは、“exposition” の向う先々で、豊かな言葉でもって自己実現をこころみようとする「解放され拡大された想像力の充満である」と Berthoff はのべている。結局、Berthoff の論旨の行きつくところは、Melville の想像力の偉大さと柔軟性を指摘することである。

多くの研究者は *Billy Budd* を Melville の探求が行きついた最終的思想のあらわれとして受けとっている。それはそれなりに根拠があるのだが、Berthoff はこの作品を Melville の芸術のもっとも「すぐれた」結晶として、特に一章をあてて論じている。Berthoff は、*Billy Budd* の allegorical な理解の仕方は、何度もこの作品を読むと的はずれであることが明らかになると前置きする。will-to-explain (説明欲) に支えられた “exposition” の様式はこの作品でも強く働いて明確な物語の論理と適切を生みだし、驚嘆に価する立派な人物 Vere 艦長と Billy をくつきりと浮びあがらせている。この様式によって Melville が *Billy Budd* で試みているのは、「存在と行為のある特定の偶発的諸例を明らかにすることだ」と Berthoff はのべている。*Billy Budd* では、称讃に価する偉大な魂の持主 Vere と Billy が軍隊の必然性のために犠牲になることが、同情的ではあるが客観的正確さを失うことなく語られる。その語り方にはまれにみる均衡を得た正確な判断と筆致の集中性と統一が見られることを

Berthoff は立証してみせる。そして Vere と Billy が示した魂の偉大さ—magnanimity—が Melville のすぐれた芸術によって読者に迫ってくるという。

Berthoff の研究全体を通して、彼の論旨にいささか Melville の芸術を過大評価しすぎる嫌いが感じられても、この研究が比較的未開拓な Melville の技巧をとりあげ、意味、思想に偏る研究に挑戦した功績は認めねばならない。しかし、技巧の存在意義を “Technique as discovery” として、作品の意味と結びつける必要性の有無をもう一度考えてみる必要があるのではなかろうか。*Billy Budd* はたしかに「すぐれた」作品ではあるけれども、*Moby-Dick* を凌駕する「偉大な」作品ではない。主題と style や form の間に適切な関係があれば「すぐれた」という形容を与えることができよう。だが、Berthoff の所論からは「すぐれた」作品は引き出せても、「偉大な、すぐれた」作品は出てこない。技巧と意味の関係を再検討を加える必要はここから生じてくるのである。Berthoff が Melville の技巧や想像力に言及しながらも、象徴の使用、象徴的想像力の機能を全く無視したのも、意味とのつながりを無視した結果であろう。Berthoff が Melville の作品の allegorical な読み方に烈しく反対した気持は理解できる。あまりにも一方的な allegorical な理解がたしかに沢山横行しているからである。けれども、それに対する反論、挑戦の意識がかえって彼の視野をせばめたとするなら、彼もまた反論意識過剰の犠牲者といわねばなるまい。

一方、Berthoff の主張する Melville の芸術の理解と鑑賞とは異った方法をとって、作品の意味の解明に向っているのが H. B. Franklin の *The Wake of Gods: Melville's Mythology* である。この表題にもあきらかな如く、H. B. Franklin は Melville の作品にどのような神話がどのように理解されてとり入れられているかを刻明に調べ、この結果にもとづいて Melville の主要作品の意味を解明しようとするのである。この種の試みは既に Richard Chase の古典神話、folklore などの archetype による解釈 (*Herman Melville*, 1949), J. Baird の primitivism の研究 (*Ishmael*, 1956), あるいは Melville にみられる東洋的要素の研究 (D. M. Finkelstein, *Melville's Orienda*, 1961) などの先例があるが、Melville に含まれるおよそ「神話」となづけられるもの一切をとり入れた点に、この書物の存在価値がある。というのも、Melville の神話の知識は、西洋の伝統的なギリシャ・ローマ神話、北欧神話、キリスト教の伝説はいうまでもなく、さま

ざまな人種を集めた船員達との接触、航海、南太平洋諸島での放浪、ヨーロッパ旅行などの体験を通して、また旅行記、航海記などの読書を通して、実に多種多様の民族神話、民族伝説にまで及んでいたからである。このような神話を、Melville がどのように作品の structure にとり入れたかを Franklin はまず指摘し、次で、これらの神話の導入によって、作品の意味がどのように理解できるかを示している。従って、この書物のもくろみは単に Melville の作品にとり入れられた神話の指摘だけでなく、最終的には作品解釈である。

Franklin の解釈によれば、*Typee* と *Omoo* が異教徒やキリスト教徒の偶像崇拝的宗教を単なる神話だときめつける理想的宗教を仮定して構成されているのに反して、*Mardi* は comparative mythology の教科書のようなもので、ヒンズー、ポリネシア、インカ、ヘブライ、ギリシャ、キリスト教、ローマ、北欧などの神話が入りこんでいる。この作品はこれ等の神話を相互に比較し、また、他の神話や偶像に比較しつつ、その間にこれ等の神話や偶像の背後に真実を求めようとする理想的宗教の探索となっていると Franklin は論じている。また、*Moby-Dick* においても様々な神話的要素が入りこんでいることを Franklin は指摘しているが、この作品においては、特にエジプト神話の Osiris と Typhon の争が中心になっているという。Osiris とは太陽神、豊饒の神、地獄の神であると同時に人間の救世主でもあり、竜を殺す者、人生の海の悪魂を追い払う者でもある。Franklin は例証をあげて Ahab がその Osiris であるという。一方白鯨は Osiris をたおした Typhon に当る。しかし Ahab は救いの神になろうとして救いの神の教——*Mardi* でいっているヒンズー教の Brami、インカの Manko、キリスト教の Alma 等の教——からふみ外れた。“Right Reason” をすて、人間同胞のきずなをたち切った Ahab には破滅しかなかったのである。

様々な神話を作中にとり入れた Melville の意図は、Franklin によれば、最終的には、キリスト教の神話を評価することだったという。Melville のキリスト教

の正統信仰に対する懷疑は様々な角度から論じられた。しかし、様々な異教の神話との比較の上になつて Melville のキリスト教に対する態度を論じた点で、Franklin は、Hawthorne をして “belief” にも “disbelief” にも安住し得ないといわしめた Melville のキリスト教に対する態度に、一つの興味ある解釈を示したといえる。

ただ一つ気になるのは、Franklin 自身、様々な神話的要素の分析とそれにもとづく解釈が作品の意味のすべてを網羅しつつすものでないことを断っておきながら、彼の所説は、彼の解釈が作品の唯一の解釈であるかのような口吻で展開することである。読者の側で作品の one of the meanings と the meaning の区別をたてる基本的な態度さえ失わなければ、Franklin の書物は貴重な参考文献となりうるといえる。

おそらく Melville 研究は今後もあとをたたないことであろう。まだ充分に開拓されていない面はいくらかでもある。Matthiessen, Feidelson, Berthoff などが試みたものを今一つダイナミックに展開して、Melville の imagination の dualism, すなわち、symbolic であると同時に expository でもある二面性、をもっと深く解明するような研究があってほしいと思うし、Melville と Shakespeare, あるいは Sir Thomas Brown などとの関係をもっと統合的に研究する者があってもよいと思うし、更に、Melville の style, imagery のもっと精緻な分析もあってほしいと思う。別の言葉でいえば、Melville はまだまだ何人登場してきても一向に差支えないのである。ただ、その際、いたずらに異説、新説の意識過剰に陥るのは御免願いたい。説得力は判断の適切さと論旨の均衡から生れるのであって、小手先の、Melville 像をとりだす怪しげな手つきからではない。我々の関心は Melville 像そのものにあるのである。ここにとりあげた Miller, Berthoff, Franklin はおよそ異った三人の Melville 像を描いてはいるが、その像を描き出す手つきの何と怪しげなことか。現代の文学批評の sophistication は refinement を意味するものであってほしいと願うのは私だけではあるまい。(同志社大学文学部助教授)

×

×

×

×

×